

漢方処方名ローマ字表記法

Standard Kampo Formula Nomenclature

ver. 1.0 2005.3.5

分担研究者：津谷喜一郎（東京大学大学院薬学系研究科医薬経済学講座客員教授，

Uppsala Monitoring Centre (UMC) Signal Reviewer)

研究協力者：佐竹元吉（日本生薬学会国際対応委員会委員長）

（50音順） 鳥居塚和生（日本東洋医学会用語委員会委員長）

引網宏彰（和漢医薬学会用語委員会委員長）

山田和男（日本東洋医学会用語委員会副委員長）

はじめに

「漢方処方名のローマ字表記法」プロジェクトは、2つの背景の下に開始された。

第1に、WHO International Drug Monitoring Centre である Uppsala Monitoring Centre (UMC, <http://www.who-umc.org/>) は、2002年から“herbal medicine” projectとして世界中の herbal medicine の ATC 分類 (Anatomical, Therapeutic and Chemical classification) プロジェクトを開始した。“HATC” プロジェクトとも称される。このプロジェクトの一環として、日本の漢方処方さらに生薬の ATC 分類を要請された。現在、約300万件の副作用情報が収載されている UMC の“Vigibase” database に、世界中で使われる日本の漢方薬などの副作用情報が収載される際にこの ATC コードが用いられることになる。この ATC コードを UMC に送るにあたって、漢方処方のローマ字表記を決定する必要がある。

第2に、現在、改正作業が行われている第十五改正日本薬局方（2006年発行予定）には、漢方処方が入り、そのローマ字表記が必要である。

上記2つの理由による漢方処方のローマ字表記は、漢方薬の使用や情報の国際化にあたり、調整し統一されることが望ましい。

本プロジェクトは、平成15、16年度厚生労働科学研究班「一般用漢方処方の見直しに資するための有用性評価（EBM 確保）手法及び安全性確保等に関する研究」（主任研究者：国立医薬品衛生研究所生薬部部長・合田幸広）の分担研究「一般用漢方処方の ATC 分類に関する研究」のサブトピックのひとつとして、「漢方処方名ローマ字表記」としてなされたものである。

ローマ字表記標準化にあたっての方法は、以下のごとくである。

- 1) ローマ字表記となる対象は、上記漢方処方の HATC 分類と同じく『一般用漢方処方の手引き』¹⁾ (1975) に現れる210処方と、2004年4月1日現在の上記210処方以外で市販されている医療用漢方製剤18処方の、合計の228処方とした。
- 2) 関係者への聞き取りと文献調査^{2), 3), 4), 5)}
- 3) これまでこの領域の関わる活動を行ってきた日本東洋医学会と和漢医薬学会それぞれの活動の歴史の確認^{6), 7), 8), 9)}

- 4) 分担研究者と研究協力者らとの12回にわたる討議 (2003.6.9, 8.25, 11.10, 2004.1.26, 3.8, 4.26, 6.21, 8.29, 10.25, 11.29, 2005.1.31, 2.15)

その結果、日本における漢方処方ローマ字表記法には、以下の5種があった。

- 1) 日本東洋医学会の使用するローマ字表記
- 2) 和漢医薬学会の使用するローマ字表記
- 3) 厚生労働省が現在 UMC に送付する際に使用するローマ字表記
- 4) (株) 医薬情報研究所の使用するローマ字表記
- 5) アイ・エム・エス・ジャパン (株) の使用するローマ字表記

それぞれを比較吟味し、より合理的なローマ字表記法について議論を重ね、以下のように標準化した。

1. ローマ字表記の原則

- (1) ヘボン式とする。
- (2) ヘボン式にない標記は、1954年内閣告示第一号「ローマ字のつづり方」¹⁰⁾におおむねしたがう。以下に本研究班としての考え方を示す。
 - 1) はねる音「ン」は n で表すが、m, b, p の前では m を用いる。
 - 2) はねる音を表す n と次に来る母音字または n や y とを切り離す必要がある場合には、n の次に ' を入れる。
 - 3) つまる音は、次に来る最初の子音字を重ねて表すが、次に ch が続く場合には c を重ねずに t を用いる。
 - 4) 長音は母音字のみ (母音字の上に ^ を付けることや、母音字を並べることはしない)。
 - 5) 特殊音の表記は適宜対応する。

2. 細則と例示

- (1) 処方名の書き始めは原則、小文字とする。

古典や定本中の処方名、または一般名などのコンセプトとしての処方名は、小文字を用いる。一般名は西洋薬においても世界的に小文字が用いられている。なお、製剤名、商品名など具体的な物質としての処方名の書き始めは大文字を用いる。

- (2) 処方名に生薬名が含まれる場合があり、その間の整合性をとる。

現行の日本薬局方は、日本名、英名、ラテン名 (生薬関係品目のみ)、日本名別名、生薬の漢字名 (生薬関係品目のみ) などを含むが、ここで「英名」は誤りであろう。より広い概念として「ローマ字表記」とすべきものである。なぜなら、日本薬局方では一部の英語 (Acid, Injection, Tablet など) を除くと roman alphabet を用いた表記であり、この roman alphabet は英語以外の言語でも用いられているためである。ephedrine は、英名表記ではなく、ローマ字表記の世界的な一般名 (generic name) である。なお、日本名の読みのローマ字表記は含まれていない。一方、生薬品目については、英語を含むものが多く、たとえば、麻黄に対し

て Ephedra Herb が記載されている。だが麻黄という日本名のローマ字表記 mao は含まれていない。このため、今回の漢方処方ローマ字表記標準化の作業が2006年発行予定の第十五改正日本薬局方に収載されることをスコープに入れると、将来なされるかもしれない生薬名の日本名のローマ字表記（例えば麻黄，mao）とも関連するものである。

(3) ローマ字表記は処方名を和読みし、ヘボン式表記法とする。

1) 「し」は「shi」, 「ち」は「chi」, 「つ」は「tsu」, 「ふ」は「fu」, 「じ」, 「ぢ」ともに「ji」, 「ず」, 「づ」ともに「zu」で表記する。「を」は使用しないので考慮しないこととする。

(例) 四物湯：shimotsuto, 治頭瘡一方：jizusoippo, 治打撲一方：jidabokuippo

2) はねる音「ン」は「n」で表す。ただし、「m, b, p」の前では「m」を用いる。

(例) 葛根湯：kakkonto, 半夏白朮天麻湯：hangebyakujutsutemmato, 甘麦大棗湯：kambakutaisoto, 抑肝散加陳皮半夏：yokukansankachimpihange

3) はねる音を表す「n」と、次にくる母音字または「n」や「y」とを切り離す必要がある場合には、「n」の次に「'」を入れる。

(例) 葛根湯加川芎辛夷：kakkontokasenyushin'i, 延年半夏湯：en'nenhangeto, 人參養榮湯：ninjin'yoeito

4) つまる音は、次にくる最初の子音字を重ねて表す。ただし、次に「ch」がくる場合は「c」を重ねずに「t」を用いる。

(例) 葛根湯：kakkonto

5) 長音は母音字のみとする。母音字の上に[^]を付けることや、母音字を並べることはしない。「ou」などは次のように表記する：

(例) ○○湯：○○to (○○tou ではない)

黄耆建中湯：ogikenchuto, 小柴胡湯：shosaikoto, 竜胆瀉肝湯：ryutanshakanto, 黄耆：ogi (ougi ではない), 地黄：jio (jiou ではない), 生姜：shokyo (shoukyou ではない), 川芎：senkyu (senkyuu ではない), 竜胆：ryutan (ryuutan ではない)

(4) 処方名の表記はハイフンで区切らない。

種々の議論の結果、ハイフンにより区切らないことを原則とした。理由は以下の3点。

- i) 非漢字文化圏での国際的な流用性に重きを置く。
- ii) ローマ字しか読めない人にとって読みやすくする。
- iii) 日本人がローマ字で記述するときに迷わなくてもよいようにする。

なお、議論の中では、以下のハイフン付けが検討された。

i) 剤形を表す漢字の前：

「湯、散、丸、飲、膏」などの剤形を示す言葉の前にハイフンを付すことが検討されたが、「飲子」の前にはハイフンを入れないなどの例外が多く、かえって分かりづらいとの意見が多かった。

ii) 加味方：

「加」によってあらわされるものは、葛根湯加川芎辛夷のように生薬が加味されたものと、桂枝茯苓丸料加薏苡仁のように処方名として独立したものがある。前者

にはハイフンをつけることも考えられるが、これらをひとつずつ正確に分別することは多大な労力を要する。

iii) 合方：

「合」によってつなげられる、加味逍遥散合四物湯や茯苓飲合半夏厚朴湯なども加味方の場合と同じくその分別は一定の法則を設定するのが困難である。

以上、ローマ字の読み手にとっても書き手にとっても、ハイフンはむしろない方が、大勢としては使いやすいという結論となった。

以下に、記載例を示す。

(例) 黄耆建中湯：ogikenchuto (ogi-kenchu-to ではない)

加味逍遥散：kamishoyosan (kami-shoyo-san ではない)

小柴胡湯：shosaikoto (sho-saiko-to ではない)

猪苓湯合四物湯：choreitogoshimotsuto (choreito-go-shimotsuto ではない)

- (5) 読みは『一般用漢方処方の手引き』¹⁾(1975)の210処方の表記を原則とする。ただし、議論の結果、以下の処方では次の読みが妥当であると考えられ、以下を採用することとした。また、これらの処方については、付記した Table の No. に*を付した。

(例) 温経湯：ウンケイトウ unkeito (onkeito ではない)

黄連阿膠湯：オウレンアキョウトウ oren'akyoto (oren'agyoto ではない)

十全大補湯：ジュウゼンタイホトウ juzentaihoto (juzendaihoto ではない)

参苓白朮散：ジンリョウビャクジュツサン jinryobyakujutsusan (jinreibyakujutsusan ではない)

疎経活血湯：ソケイカクケツトウ sokeikakketsuto (sokeikaketto ではない)

抑肝散：ヨクカンサン yokukansan (yokkansann ではない)

- (6) 複数の処方名ないし類似処方

複数の処方名ないし類似処方が存在するものは、以下とした。また、これらの処方については、付記した Table の No. に*を付した。

(例) 桂芍知母湯は、OTC 製剤に「桂枝芍薬知母湯」が存在するので後者を括弧内に表記する。

柴朴湯は、医療用製剤名としてこれのみ存在するのでこれを採用する。小柴胡合半夏厚朴湯ではない。

附子理中湯は、医療用製剤として存在するが、一般名として「附子人参湯」が使用されるので括弧内に表記する。

八味地黄丸は、医療用製剤と OTC 製剤として「八味丸」も使用されるので括弧内に表記する。

実脾飲は、「分消湯」と構成生薬が異なるので独立して扱う。

- (7) 漢字の表記

議論の中で処方の表記に用いる漢字が文献によって異なることが指摘され、漢字、カタカナ、ローマ字の対応リストを作る際にも、漢字を吟味すべきとされた。種々の議論から、付記する漢字の採択に当たって以下の2点を原則とすることとなった。

- 1) 常用漢字（1981）を原則とする。漢字学でいう、正字（いわゆる旧字体）、異字、略字、誤字のうち、日本の漢字は略字が多い。すなわち、今回のリスト作成においては、漢字学でいう正字にはこだわらない。
- 2) 日本で広く使われる漢字を用いる。コンピュータによる入力を容易にするためである。そのため、第十四改正日本薬局方（2001年発行）や日本薬局方外生薬規格1989増補版などとは異なる漢字（「葛」、「芍」、「蓮」など）もある。

なお、本研究はローマ字表記標準化が目的であり、漢字表記やカタカナ表記を統一する目的ではない。

以下に、記載例を示す。また、これらの処方については、付記した Table の No. に*を付した。

（例）

「巳」の字体を用いる。（「巳」ではない。）

（190）防巳黄耆湯，（191）防巳茯苓湯，（227）木防巳湯

「葛」の字体を用いる。（「葛」ではない。）

（19）葛根黄連黄芩湯，（20）葛根紅花湯，（21）葛根湯，
（22）葛根湯加川芎辛夷，（46）桂枝加葛根湯，（119）升麻葛根湯，
（164）独活葛根湯，（212）葛根加朮附湯

「芩」の字体を用いる。（「岑」ではない。）

（11）黄芩湯，（19）葛根黄連黄芩湯，（88）三物黄芩湯

「芍」の字体を用いる。（「芍」ではない。）

（48）桂枝加芍薬生姜人参湯，（49）桂枝加芍薬大黄湯，（50）桂枝加芍薬湯，
（82）柴芍六君子湯，（101）芍薬甘草湯，（161）当帰芍薬散，
（215）桂芍知母湯（桂枝芍薬知母湯），（217）芍薬甘草附子湯，
（223）当帰芍薬散加附子

「茹」の字体を用いる。（「筍」ではない。）

（145）竹茹温胆湯

「榔」の字体を用いる。（「榔」ではない。）

（214）九味檳榔湯

「遙」の字体を用いる。（「遥」ではない。）

（26）加味逍遙散，（27）加味逍遙散合四物湯，（120）逍遙散，（175）八味逍遙散

「蛎」の字体を用いる。（「蠣」ではない。）

（52）桂枝加竜骨牡蛎湯，（78）柴胡加竜骨牡蛎湯

「蓮」の字体を用いる。（「蓮」ではない。）

（132）清心蓮子飲

「**」の部首を用いる。（「**」ではない。）

（4）茵陳蒿湯，（22）葛根湯加川芎辛夷，（57）桂枝茯苓丸料加薏苡仁，など
（なお、この項に該当する処方多数であるので*を付していない。）

参考文献

- 1) 厚生省薬務局（監修），一般用漢方処方の手引き，薬業時報社，1975
- 2) Park J, Park HJ, Lee HJ, Ernst E. What's in a name? A systematic review of the nomenclature of Chinese medical formulae. *The American Journal of Chinese Medicine* 2002 ; 30 (2 , 3): 419-27.
- 3) 日本医薬情報センター編，医療薬 日本医薬品集，じほう，2004
- 4) 日本医薬情報センター編，一般薬 日本医薬品集，じほう，2004
- 5) 日本漢方生薬製剤協会編，医療用漢方製剤要覧，日本漢方生薬製剤協会，1995
- 6) 東洋医学用語集（1999年度版）．（社）日本東洋医学会，1999年4月．〔漢方処方228処方のリストは，i) 漢字名，ii) ひらがな，iii) ローマ字，iv) 中国語のピンインの4要素からなる（p.13-9）．なお，164種の生薬リストは，i) 漢字名，ii) ひらがな，iii) ローマ字，iv) ラテン名，v) 英名の5要素からなる（p.20-4）．〕
- 7) 鳥居塚和生，用語や表記法に関する日本東洋医学会の活動の経緯（2003年10月28日）
- 8) 和漢医薬学会がこれまで使用してきたローマ字表記リスト（i) 漢字名，ii) ひらがな，iii) ローマ字，iv) 中国語のピンイン，124処方）（1984年12月20日）
- 9) 引網宏彰，和漢医薬学会「方剤名記載のための申し合わせ事項」の作成の経緯とリストに収載された方剤が選択された根拠について（2003年10月29日）
- 10) ローマ字のつづり方，1954（昭和29）年12月9日付内閣告示第一号による．新村出（編）広辞苑第5版，岩波書店，1998，p.2962-3

謝辞

本プロジェクトにご協力いただいた，東京大学大学院薬学系研究科医薬経済学博士課程学生・詫間浩樹，同・菊田健太郎，同薬学部学生・リヨン・フォンマン・アグネス（梁鳳雯）の諸君に謝意を表す。

Table 漢方処方 of the Roman alphabet (210+18 処方, 2005)

ver. 1.0 5 March 2005

No.	漢字 (Han character)	カタカナ (katakana)	ローマ字 (Roman alphabet)
1	安中散	アンチュウサン	anchusan
2	胃風湯	イフウトウ	ifuto
3	胃苓湯	イレイトウ	ireito
4	茵陳蒿湯	インチンコウトウ	inchinkoto
5	茵陳五苓散	インチンゴレイサン	inchingoreisan
6*	溫経湯	ウンケイトウ	unkeito
7	溫清飲	ウンセイイン	unseiin
8	溫胆湯	ウインタントウ	untanto
9	延年半夏湯	エンネンハンゲトウ	en'nenhangeto
10	黄耆建中湯	オウギケンチュウトウ	ogikenchuto
11*	黄芩湯	オウゴントウ	ogonto
12	応鐘散	オウショウサン	oshosan
13*	黄連阿膠湯	オウレンアキョウトウ	oren'akyoto
14	黄連解毒湯	オウレンジドクトウ	orengedokuto
15	黄連湯	オウレントウ	orento
16	乙字湯	オツジトウ	otsujito
17	化食養脾湯	カシヨクヨウヒトウ	kashokuyohito
18	藿香正気散	カッコウショウキサン	kakkoshokisan
19*	葛根黄連黄芩湯	カクコンオウレンオウゴントウ	kakkon'oren'ogonto
20*	葛根紅花湯	カクコンコウカトウ	kakkonkokato
21*	葛根湯	カクコントウ	kakkonto
22*	葛根湯加川芎辛夷	カクコントウカセンキュウシンイ	kakkontokasenkyushin'i
23	加味温胆湯	カミウインタントウ	kamiuntanto
24	加味帰脾湯	カミキヒトウ	kamikihito
25	加味解毒湯	カミゲドクトウ	kamigedokuto
26*	加味逍遙散	カミショウヨウサン	kamishoyosan
27*	加味逍遙散合四物湯	カミショウヨウサンゴウシモツトウ	kamishoyosangoshimotsuto
28	加味平胃散	カミヘイイサン	kamiheiisan
29	乾姜人参半夏丸	カンキョウニンジンハンゲガン	kankyoninjinhangegan
30	甘草瀉心湯	カンゾウシャシントウ	kanzoshashinto
31	甘草湯	カンゾウトウ	kanzoto
32	甘麦大棗湯	カンバクタイソウトウ	kambakutaisoto
33	帰耆建中湯	キギケンチュウトウ	kigikenchuto
34	桔梗湯	キキョウトウ	kikyoto
35	帰脾湯	キヒトウ	kihito
36	芎帰膠艾湯	キュウキキョウガイトウ	kyukikyogaito
37	芎帰調血飲	キュウキチヨウケツイン	kyukichoketsuin
38	芎帰調血飲第一加減	キュウキチヨウケツインダイイチカゲン	kyukichoketsuindaiichikagen
39	響声破笛丸	キョウセイハテキガン	kyoseihatekigan
40	杏蘇散	キョウソサン	kyososan

No.	漢字 (Han character)	カタカナ (katakana)	ローマ字 (Roman alphabet)
41	苦参湯	クジントウ	kujinto
42	驅風解毒散	クフウゲドクサン	kufugedokusan
43	荊芥連翹湯	ケイガイレンギョウトウ	keigairengyoto
44	鷄肝丸	ケイカンガン	keikangan
45	桂枝加黄耆湯	ケイシカオウギトウ	keishikaogito
46*	桂枝加葛根湯	ケイシカカッコントウ	keishikakakkonto
47	桂枝加厚朴杏仁湯	ケイシカコウボクキョウニンントウ	keishikakobokukyoninto
48*	桂枝加芍薬生姜人参湯	ケイシカシャクヤクショウキョウニンジン トウ	keishikashakuyakushokyoninjinto
49*	桂枝加芍薬大黄湯	ケイシカシャクヤクダイオウトウ	keishikashakuyakudaioto
50*	桂枝加芍薬湯	ケイシカシャクヤクトウ	keishikashakuyakuto
51	桂枝加朮附湯	ケイシカジュツブトウ	keishikajutsubuto
52*	桂枝加竜骨牡蛎湯	ケイシカリユウコツボレイトウ	keishikaryukotsuboreito
53	桂枝加苓朮附湯	ケイシカリヨウジュツブトウ	keishikaryojutsubuto
54	桂枝湯	ケイシトウ	keishito
55	桂枝人参湯	ケイシニンジンントウ	keishininjinto
56	桂枝茯苓丸	ケイシブクリヨウガン	keishibukuryogan
57	桂枝茯苓丸料加薏苡仁	ケイシブクリヨウガンリヨウカヨクイニン	keishibukuryoganryokayokuinin
58	啓脾湯	ケイヒトウ	keihito
59	荊防敗毒散	ケイボウハイドクサン	keibohaidokusan
60	桂麻各半湯	ケイマカクハントウ	keimakakuhanto
61	鷄鳴散加茯苓	ケイメイサンカブクリヨウ	keimeisankabukuryo
62	堅中湯	ケンチュウトウ	kenchuto
63	甲字湯	コウジトウ	kojito
64	香砂平胃散	コウシャヘイイサン	koshaheisan
65	香砂養胃湯	コウシャヨウイトウ	koshayoito
66	香砂六君子湯	コウシャリックンシトウ	kosharikkunshito
67	香蘇散	コウソサン	kososan
68	厚朴生姜半夏人参甘草湯	コウボクショウキョウハンゲニンジンカン ゾウトウ	kobokushokyohangeninjinanzoto
69	五虎湯	ゴコトウ	gokoto
70	牛膝散	ゴシツサン	goshitsusan
71	五積散	ゴシャクサン	goshakusan
72	牛車腎気丸	ゴシャジンキガン	goshajinkigan
73	呉茱萸湯	ゴシュユトウ	goshuyuto
74	五物解毒散	ゴモツゲドクサン	gomotsugedokusan
75	五淋散	ゴリンサン	gorinsan
76	五苓散	ゴレイサン	goreisan
77	柴陷湯	サイカントウ	saikanto
78*	柴胡加竜骨牡蛎湯	サイコカリユウコツボレイトウ	saikokaryukotsuboreito
79	柴胡桂枝乾姜湯	サイコケイシカンキョウトウ	saikokeishikankyoto
80	柴胡桂枝湯	サイコケイシトウ	saikokeishito

No.	漢字 (Han character)	カタカナ (katakana)	ローマ字 (Roman alphabet)
81	柴胡清肝湯	サイコセイカントウ	saikoseikanto
82*	柴芍六君子湯	サイシャクリクンシトウ	saishakurikkunshito
83*	柴朴湯	サイボクトウ	saibokuto
84	柴苓湯	サイレイトウ	saireito
85	左突膏	サトツコウ	satotsuko
86	三黄瀉心湯	サンオウシャシントウ	san'oshashinto
87	酸棗仁湯	サンソウニントウ	sansoninto
88*	三物黄芩湯	サンモツオウゴントウ	sammotsuogonto
89	滋陰降火湯	ジインコウカトウ	jiinkokato
90	滋陰至宝湯	ジインシホウトウ	jiinshihoto
91	紫雲膏	シウンコウ	shiunko
92	四逆散	シギヤクサン	shigyakusan
93	四君子湯	シクンシトウ	shikunshito
94	滋血潤腸湯	ジケツジュンチョウトウ	jiketsujunchoto
95	七物降下湯	シチモツコウカトウ	shichimotsukokato
96*	実脾飲	ジッピイン	jippiin
97	柿蒂湯	シテイトウ	shiteito
98	四物湯	シモツトウ	shimotsuto
99	四苓湯	シレイトウ	shireito
100	炙甘草湯	シャカンゾウトウ	shakanzoto
101*	芍薬甘草湯	シャクヤクカンゾウトウ	shakuyakukanzoto
102	鷓鴣菜湯 (三味鷓鴣菜湯)	シャコサイトウ (サンミシャコサイトウ)	shakosaito or sammishakosaito
103	蛇床子湯	ジャショウシトウ	jashoshito
104*	十全大補湯	ジュウゼンタイホトウ	juzentaihoto
105	十味敗毒湯	ジュウミハイドクトウ	jumihaidokuto
106	潤腸湯	ジュンチョウトウ	junchoto
107	蒸眼一方	ジョウガンイッポウ	jogan'ippo
108	生姜瀉心湯	ショウキョウシャシントウ	shokyoshashinto
109	小建中湯	ショウケンチュウトウ	shokenchuto
110	小柴胡湯	ショウサイコトウ	shosaikoto
111	小柴胡湯加桔梗石膏	ショウサイコトウカキキョウセッコウ	shosaikotokakikyosekko
112	小承気湯	ショウジョウキトウ	shojokito
113	小青竜湯	ショウセイリユウトウ	shoseiryuto
114	小青竜湯加石膏	ショウセイリユウトウカセッコウ	shoseiryutokasekko
115	小青竜湯合麻杏甘石湯	ショウセイリユウトウゴウマキョウカンセキトウ	shoseiryutogomakyokansekito
116	椒梅湯	ショウバイトウ	shobaito
117	小半夏加茯苓湯	ショウハンゲカブクリョウトウ	shohangekabukuryoto
118	消風散	ショウフウサン	shofusan
119*	升麻葛根湯	ショウマカクコントウ	shomakakkonto
120*	逍遙散	ショウヨウサン	shoyosan

No.	漢字 (Han character)	カタカナ (katakana)	ローマ字 (Roman alphabet)
121	辛夷清肺湯	シンイセイハイトウ	shin'iseihaito
122	秦艽羌活湯	ジンギョウキョウカツトウ	jingyokyokatsuto
123	秦艽防風湯	ジンギョウボウフウトウ	jingyobofuto
124	參蘇飲	ジンソイン	jinsoin
125	神秘湯	シンピトウ	shimpito
126*	參苓白朮散	ジンリョウビャクジュツサン	jinryobyakujutsusan
127	清肌安蛔湯	セイキアンカイトウ	seikiankaito
128	清湿化痰湯	セイシツケタントウ	seishitsuketanto
129	清上蠲痛湯	セイジョウケンツウトウ	seijokentsuto
130	清上防風湯	セイジョウボウフウトウ	seijobofuto
131	清暑益気湯	セイショエツキトウ	seishoekkito
132*	清心蓮子飲	セイシンレンシイン	seishinrenshiin
133	清肺湯	セイハイトウ	seihaito
134	折衝飲	セッショウイン	sesshoin
135	川芎茶調散	センキュウチャチヨウサン	senkyuchachosan
136	千金鷄鳴散	センキンケイメイサン	senkinkeimeisan
137	錢氏白朮散	ゼンシビャクジュツサン	zenshibyakujutsusan
138*	疎経活血湯	ソケイカッケツトウ	sokeikakketsuto
139	蘇子降気湯	ソシコウキトウ	soshikokito
140	大黃甘草湯	ダイオウカンゾウトウ	daiokanzoto
141	大黃牡丹皮湯	ダイオウボタンピトウ	daiobotampito
142	大建中湯	ダイケンチュウトウ	daikenchuto
143	大柴胡湯	ダイサイコトウ	daisaikoto
144	大半夏湯	ダイハンゲトウ	daihangeto
145*	竹茹温胆湯	チクジョウタントウ	chikujountanto
146	治打撲一方	ヂダボクイッポウ	jidabokuippo
147	治頭瘡一方	ヂヅソウイッポウ	jizusoippo
148	中黄膏	チュウオウコウ	chuoko
149	調胃承気湯	チヨウイジョウキトウ	choijokito
150	丁香柿蒂湯	チヨウコウシテイトウ	chokoshiteito
151	釣藤散	チヨウトウサン	chotosan
152	猪苓湯	チヨレイトウ	choreito
153	猪苓湯合四物湯	チヨレイトウゴウシモツトウ	choreitogoshimotsuto
154	通導散	ツウドウサン	tsudosan
155	桃核承気湯	トウカクジョウキトウ	tokakujokito
156	当帰飲子	トウキインシ	tokiinshi
157	当帰建中湯	トウキケンチュウトウ	tokikenchuto
158	当帰散	トウキサン	tokisan
159	当帰四逆加呉茱萸生姜湯	トウキシギャクカゴシュユシヨウキョウトウ	tokishigyakukagoshuyushokyoto
160	当帰四逆湯	トウキシギャクトウ	tokishigyakuto

No.	漢字 (Han character)	カタカナ (katakana)	ローマ字 (Roman alphabet)
161*	当帰芍薬散	トウキシヤクヤクサン	tokishakuyakusan
162	当帰湯	トウキトウ	tokito
163	当帰貝母苦参丸料	トウキバイモクジンガンリョウ	tokibaimokujinganryo
164*	独活葛根湯	ドッカツカクコントウ	dokkatsukakkonto
165	独活湯	ドッカツトウ	dokkatsuto
166	二朮湯	ニジュツトウ	nijutsuto
167	二陳湯	ニチントウ	nichinto
168	女神散	ニョシンサン	nyoshinsan
169	人参湯	ニンジントウ	ninjinto
170	人参養栄湯	ニンジンヨウエイトウ	ninjin'yoeito
171	排膿散	ハイノウサン	hainosan
172	排膿湯	ハイノウトウ	hainoto
173	麦門冬湯	バクモンドウトウ	bakumondoto
174*	八味地黄丸 (八味丸)	ハチミジオウガン (ハチミガン)	hachimijiogan or hachimigan
175*	八味逍遙散	ハチミショウヨウサン	hachimishoyosan
176	半夏厚朴湯	ハンゲコウボクトウ	hangekobokuto
177	半夏瀉心湯	ハンゲシャシントウ	hangeshashinto
178	半夏白朮天麻湯	ハンゲビヤクジュツテンマトウ	hangebyakujutsutemmato
179	白虎加桂枝湯	ビヤッコカケイシトウ	byakkokakeishito
180	白虎加人參湯	ビヤッコカニンジントウ	byakkokaninjinto
181	白虎湯	ビヤッコトウ	byakkoto
182	不換金正気散	フカンキンショウキサン	fukankinshokisan
183	伏竜肝湯	ブクリユウカントウ	bukuryukanto
184	茯苓飲	ブクリョウイン	bukuryoin
185	茯苓飲加半夏	ブクリョウインカハンゲ	bukuryoinkahange
186	茯苓飲合半夏厚朴湯	ブクリョウインゴウハンゲコウボクトウ	bukuryoingohangekobokuto
187	茯苓沢瀉湯	ブクリョウタクシャトウ	bukuryotakushato
188	分消湯	ブンショウトウ	bunshoto
189	平胃散	ヘイイサン	heiisan
190*	防已黄耆湯	ボウイオウギトウ	boiogito
191*	防已茯苓湯	ボウイブクリョウトウ	boibukuryoto
192	防風通聖散	ボウフウツウショウサン	bofutsushosan
193	補気建中湯	ホキケンチュウトウ	hokikenchuto
194	補中益气湯	ホチュウエッキトウ	hochuekkito
195	補肺湯	ホハイトウ	hohaito
196	麻黄湯	マオウトウ	maoto
197	麻杏甘石湯	マキョウカンセキトウ	makyokansekito
198	麻杏薏甘湯	マキョウヨクカントウ	makyoyokukanto
199	麻子仁丸	マシニンガン	mashiningan
200	楊柏散	ヨウハクサン	yohakusan

No.	漢字 (Han character)	カタカナ (katakana)	ローマ字 (Roman alphabet)
201	薏苡仁湯	ヨクイニントウ	yokuininto
202*	抑肝散	ヨクカンサン	yokukansan
203	抑肝散加陳皮半夏	ヨクカンサンカチンピハンゲ	yokukansankachimpihange
204	立効散	リッコウサン	rikkosan
205	六君子湯	リクンシトウ	rikkunshito
206	竜胆瀉肝湯	リュウタンシャカントウ	ryutanshakanto
207	苓姜朮甘湯	リョウキョウジュツカントウ	ryokyojutsukanto
208	苓桂朮湯	リョウケイカンソウトウ	ryokeikansoto
209	苓桂朮甘湯	リョウケイジュツカントウ	ryokeijutsukanto
210	六味丸	ロクミガン	rokumigan

Annex 漢方210処方以外の医療用漢方製剤 (18処方, 2005)

No.	漢字 (Han character)	カタカナ (katakana)	ローマ字 (Roman alphabet)
211	越婢加朮湯	エッピカジュツトウ	eppikajutsuto
212*	葛根加朮附湯	カクコンカジュツブトウ	kakkonkajutsubuto
213	桔梗石膏	キキョウセッコウ	kikyosekko
214*	九味檳榔湯	クミビンロウトウ	kumibinroto
215*	桂芍知母湯 (桂枝芍薬知母湯)	ケイシャクチモトウ (ケイシシャクヤクチモトウ)	keishakuchimoto or keishishakuyakuchimoto
216	梔子柏皮湯	シシハクヒトウ	shishihakuhto
217*	芍薬甘草附子湯	シャクヤクカンゾウブシトウ	shakuyakukanzobushito
218	真武湯	シンブトウ	shimbuto
219	大柴胡湯去大黄	ダイサイコトウキョダイオウ	daisaikotokyodaio
220	大承気湯	ダイジョウキトウ	daijokito
221	大防風湯	ダイボウフウトウ	daibofuto
222	腸癰湯	チョウヨウトウ	choyoto
223*	当帰芍薬散加附子	トウキシヤクヤクサンカブシ	tokishakuyakusankabushi
224	排膿散及湯	ハイノウサンキュウトウ	hainosankyuto
225*	附子理中湯 (附子人參湯)	ブシリチュウトウ (ブシニンジントウ)	bushirichuto or bushininjinto
226	麻黄附子細辛湯	マオウブシサイシントウ	maobushisaishinto
227*	木防已湯	モクボウイトウ	mokuboitto
228	苓甘姜味辛夏仁湯	リョウカンキョウミシングニントウ	ryokankyomishingeninto

新一般用漢方処方の手引き案 (新 210 処方案)

一般用漢方処方の見直しを図るための調査研究班

平成 18 年 3 月

「新一般用漢方処方の手引き案」（新210処方案）提出にあたって

「一般用漢方処方の見直しを図るための調査研究」研究班代表 合田幸広

近年、急速な高齢化の進展や生活習慣病の増加などの疾病構造の変化、生活の質（QOL）の追求等に伴い、自分の健康に強い関心を持つ国民が増えるとともに、薬局や薬店の薬剤師等による適切なアドバイスの下で、身近にある一般用医薬品を利用するセルフメディケーションの考え方が広がりつつある。一般用医薬品のあり方等に関しては、これまでも様々な場で検討されてきた。しかしながら、以前に比べて高齢者の全人口に占める割合がさらに増加し、国民の健康ニーズも多様化している中で、今後、保健・医療資源としての一般用医薬品の有効活用を進めていくためには、国民の新たなニーズに対応し得る一般用医薬品を育成していく必要がある。この様な背景から、厚生労働省では国民の新たなニーズに対応し得る一般用医薬品の育成を考え、平成14年の6月から一般用医薬品承認審査合理化等検討会を開催し、11月にその中間報告として、「セルフメディケーションにおける一般用医薬品のあり方について 提言-具体的な方策-」を発表している。一般用漢方処方においては、昭和40年代末に当時の厚生省より210の処方について承認審査の内規が公表され、そのまま現在に至っているため、生活環境の変化や急激な人口の高齢化に伴う疾病構造の変化等に伴い国民のニーズに合致しなくなってきた面が指摘され、具体的に、以下のような一般用漢方処方「210処方」の見直しが提言されている。

- (1) 処方の選別：疾病構造の変化等に対応した、処方の追加・削除等。
- (2) 処方内容の改正：各人の体質等（「証」という）による「しぼり」（制限）を必要に応じて明確化。また、効能・効果を現代に即した症状表現へ変更・追加する等。
- (3) 情報提供等：漢方処方中の生薬の分量（配合量、満量に対する比率）やエキス抽出溶媒の分かりやすい表示、一般用漢方処方で用いられている生薬については、品質確保や情報公開等を目的として日本薬局方等への収載等。

「一般用漢方処方の見直しを図るための調査研究」は、この提言を受けて、一般用漢方処方の見直しを研究サイドから検討する目的で「一般用漢方処方の見直しに資するための有用性評価（EBM確保）手法及び安全性確保等に関する研究」の中の分担研究課題として、平成15年4月から平成18年3月までの3年間に行われたものである。提言にある見直しが行われた場合、漢方医学、生薬学全体に影響を与えるものと考えられる。さらに、提言に書かれたように、見直しは、国民の新たなニーズに適切に対応出来るよう検討する必要がある。そのため、本調査研究班は、日本東洋医学会、和漢医薬学会、日本生薬学会、日本薬剤師会等に関係の深い五人の先生方（佐竹元吉、寺沢捷年、中田敬吾、花輪壽彦、三上正利）に研究班員としてお集まり頂き、まず平成15年度に、疾病構造の変化等に対応した追加・削除処方の選定を行った後、平成16年度より、日本漢方生薬製剤協会（日漢協）の一般用製剤委員会のメンバーにも加わって頂き、構成生薬、用法用量、効能効果、処方の解説等について検討し

た。

現行の「210処方」は、昭和45年から46年にかけて、大塚敬節先生、浅野正義先生、菊谷豊彦先生、西本和光先生を委員とする当時の岡薬務局製薬課長の私的な会である「漢方打合せ会」により決められたもので、日本の成書にある680処方から、一般用漢方処方として相応しい210処方を選定、ついで、昭和47年から日薬連薬制委員会漢方専門委員会で原案の作成を開始し、20数回に渡る審議の後、一般用医薬品として承認される漢方210処方について、その成分、用法・用量、効能効果など具体的な基準を公表したものだと言われている。本調査研究の手法も、この先例にならい、まず研究者（医師、薬剤師）サイドで処方を選定したのち、業界団体の協力を得て、「新一般用漢方処方の手引き案」（新210処方案）を完成させた。

新210処方案の特徴は、

1. 疾病構造の変化に対応した新規処方の収載
2. 基本処方と類方（加減法等）を組み合わせた処方記載
3. 「証」の概念に対応した「しぼり」の導入
4. 現代に即した効能・効果の見直し
5. 第15改正日本薬局方に対応した構成生薬の表記
6. 成書に基づいた処方構成（成分及び分量）の記載の妥当性の再確認
7. 解説と参考資料の充実
8. 原典と出典の区別

等があげられる。

1. は、中間報告書の趣旨に従い、生活環境の変化や急激な人口の高齢化に伴う疾病構造の変化に対応する処方を、平成15年度にそれぞれの研究班員が優先順位をつけて推薦したのち、研究班で討議を行い、一般用として相応しいと考え得る85処方（出典、処方構成が異なる同一名処方2組を含む。この場合、出典を括弧書きで表記）について選択したものである。特に、附子製剤については現行の「210処方」の設定時、配合される加工ブシの毒性に対する安全性が充分確保されない恐れがあったことより、医療現場では多くの処方が用いられているにもかかわらず、その多くが採択されなかった経緯がある。他方、加工ブシは、平成16年12月に日本薬局方第14局第二追補に収載され、品質が規格化され安全性確保が容易となった。従って、本研究班では、加工ブシの安全性が確保されたものと考え、加工ブシ含有処方を一般用として選択することに問題がないと判断した。

2. は、提言案に即し、より漢方的な考え方を新処方案に盛り込むため行ったものである。従来処方と新規収載候補処方を合わせ、それぞれ各処方間の関連性を検討し、基本処方210と、基本となる処方に一部の生薬を加減して構成するいわゆる「類方」88に分類した（既収載処方のうち去加法を別処方とした2処方、湯剤と散剤で処方名が異なるものを別処方とした1処方があるため、総処方が298となる）。基本処方、類方の分類は、処方内容（構成生薬）、効能効果（使用方法）、処方の著名度に基づいて行った。類方が、基本処方に続いて記載されることで、各処方の特徴が明確になるとともに、実際の使用時の処方選択に際し、有用な

関連情報が容易に得られるものと考えられる。また、そのような記述を目指した。なお、新処方案は、基本処方が210となったため、略称を新210処方案とした。

3. は、一般用の処方でも、より漢方の考え方に即した処方の選択が行われるように行ったものである。特に、体力に関する「しぼり」は、漢方を専門としない一般用の漢方処方の取扱者でも、ある程度の判断ができるものと考え、巻末に参考資料として、体力を5段階、それぞれの処方について体力に対する適応度を3段階でデジタル表示した。

4. は、文献に基づき、アレルギー性鼻炎、五十肩等、一般用処方としての有用性が認められる効能・効果を新規に記載するとともに、胃アトニー、胃腸カタルを胃腸虚弱と書き換えるなど、判りにくい効能・効果の書き直しを行ったものである。

5. は、構成生薬の表記で混乱のあった乾生姜を局方収載名（カタカナ名の正名ではなく、漢字表記の別名を用いた）生姜に統一し、生ショウガは、ヒネショウガと記述することで、明解な記載としたものである。また、朮については、出来る限り、局方収載名の白朮、蒼朮のどちらを使うべきか記述した。また、附子も全て局方収載名の加工ブシとして記述した。なお、従来の「210処方」では、構成生薬は「成分及び分量」として表記されているが、成分という表現は、通常単一化合物に用いられることを考慮して「処方構成」とし、それぞれの生薬は構成生薬と呼称した。さらに、本文中では、全て構成生薬は上記局方収載名としたが、参考文献の表中での構成生薬名は、参考文献での表記をそのまま記載した。従って、表中では従来どおり、乾生姜、朮等の表現が用いられている。

6. は、既収載、新規収載の全ての処方について、成書に基づいた処方構成（成分及び分量）の記載の妥当性の再確認を行ったものである。

7. は、追加処方だけでなく、現行処方についても、1. - 6. の考えに従って行ったもので、特に、これまで解説がなかった処方についても、全て解説を記述した。なお、従来の「解説」の項は、解説と参考文献とその処方構成の表ならびにその注から構成されていたが、編集上の都合で、それぞれの処方の第一ページに、本文として文章の解説を記載し、第二ページ以降に、参考資料として、参考文献とその処方構成の表ならびにその注を記載した。

8. 現行の「210処方」では「解説」の欄に記載があったものであるが、原典であるか出典であるか不明であった。新210処方案では、原典は当該処方に関する記述が初めて行われた文献、出典は当該処方の具体的な使用法が記された文献とし、新たにそれぞれの欄を設け、記述を行った。

以上、新210処方案は、3年間で14回の研究班会議と、諸先生方並びに日漢協の委員の方々の多くの事前準備並びに予備検討会議での成果を元に作成されたものである。研究班の全ての関係者の方々に深甚なる謝意を表すとともに、本研究班の成果が、引き続き行政レベルで検討され、提言どおり一般用漢方処方210処方が見直された「新一般用漢方処方の手引き」が完成し、漢方処方が、現代の国民のニーズにあったセルフメディケーションに貢献することを望むものである。

基本方針ならびに注意事項

基本方針並びに注意事項

このたび本研究班は「一般用漢方処方の手引き」の改訂作業を行ったが、この作業に当たっての基本方針と全ての漢方製剤（漢方処方に基づいて調製された製剤）に共通する一般的注意事項について以下に記す。

1. 基本方針

1) 証について

漢方製剤は漢方独自の病態認識によって判断された「証」に基づいて用いることが、有効性および安全性を確保するために重要であることから、新たに「しぼり」の項目を設定することとした。

漢方の病態認識には陰陽、虚実、気血水、五臓などがあるが「しぼり」の記述に当たっては、この種の専門用語を用いることを極力回避し、一般的に理解し易い言葉に置き換えてある。

虚実の概念は以下のように標記した。

- 1) 実の病態が適応となるものには：体力が充実して
- 2) 虚実の尺度で中間の病態が適応となるものには：体力中等度で
- 3) 虚の病態が適応となるものには：体力虚弱で
- 4) 虚実に関わらず幅広く用いられるものについては：体力に関わらず、と記した。

しかし、本書に収載した全ての漢方処方を上記の4種の分類いずれかに収めることには無理が生じる。すなわち個々の漢方処方の適応病態は虚実という尺度で見ると、裾野を広げた山のような形をしており、しかも裾野の狭いものや広いものがあるからである。そこで、裾野が虚実中間から実に分布するものについては「体力中等度あるいはそれ以上で」と表現し、逆に裾野が虚実中間から虚の病態に分布するものは「体力中等度あるいはそれ以下で」と表記した。本書の巻末には本書に収載した全ての漢方処方についてカラーバーで虚実の尺度から見た適応病態の位置づけを一覧表として掲げた。このカラーバーで「2」と記された色の濃い部分は中心的な適応病態の位置であり、「1」と記した色の淡い部分は裾野の広がりを示している。

陰陽の概念は「しぼり」の中に、「陽」の病態を適応とするものは「のぼせがみで顔色が赤く」などの熱症状として表記し、また「陰」の病態は「疲れやすく冷えやすいものの」などの寒性の症状を示す表現で記した。

五臓の病態は漢方で言う「脾胃虚弱」の病態が適応となるものには「胃腸虚弱で」と記し、「肝陽上亢」のような肝の失調状態が適応となるものには「いらいらして落ち着きのないもの」などの表現を「しぼり」の中に組み込んだ。

気血水についても、「口渇があり、尿量が減少するもの」（水毒）、「皮膚の色つやが悪く」（血虚）などの表現を用いて適宜「しぼり」に組み入れた。

言うまでもなく漢方処方の適応病態（証）は虚実の尺度だけでは表現できない。そこで、巻末のカラーバー表記が同じであっても「しぼり」の表現が異なる場合がある。これは陰陽などの尺度も勘案した結果であることをご了解頂きたい。

2) 構成生薬の取り扱いについて

① ヒネショウガ、生姜、乾姜

生薬の「生姜」には食用に用いる形の「ヒネショウガ」とこれを乾燥した市場流通品「生姜」がある。日本薬局方では、生薬は、生薬総則で乾燥品であることが規定されており、

「ヒネショウガ」は局方の「ショウキョウ（生姜）」ではない。本書構成生薬の項では、全て公的規格を優先している。従って、「生姜」と記載されている場合は、局方の「ショウキョウ（生姜）」を示す。他方、臨床の現場では、手近にある「ヒネショウガ」を用いることがある。「ヒネショウガ」を乾燥させて「生姜」を作ると、重量は約3分の1になる。そこで本書構成生薬の項では、「ヒネショウガ」を用いることが可能となるよう「生姜」を1gとした場合には（ヒネショウガを用いる場合は3g）と括弧書した。なお、市場や文献では、「ヒネショウガ」とこれを乾燥した「ショウキョウ（生姜）」を区別するため、乾燥品を乾生姜と称することがあるが、この表現は、構成生薬の項では用いていない。これらとは別に柴胡桂枝乾姜湯などに配合される「乾姜」がある。経験的に知られていることは嘔吐やむかつきを止める場合にはヒネショウガが適しており、身体を温め、新陳代謝を高めるには「乾姜」が適しているとされている。日本薬局方では「カンキョウ（乾姜）」はショウガを湯通し又は蒸したものと定義されている。構成生薬の項では、ショウガを湯通し又は蒸し修治が行われたものは、全て「乾姜」と表現されている。この他に文献を調査すると「干姜」という表現もある。本研究班では「干姜」と局方「生姜」を同一のものと考えた。

② 朮、白朮、蒼朮

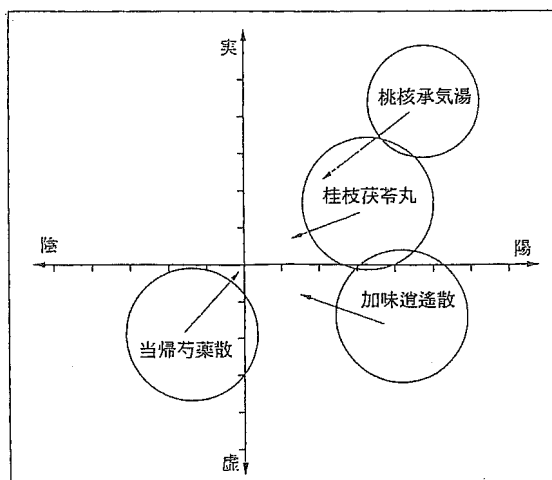
漢方の古典には単に「朮」としての記載が少なくない。しかし今日では「白朮」と「蒼朮」を区別している。経験的に知られていることは「白朮」は胃腸虚弱を治し、水分代謝を調整するのに適しており、他方「蒼朮」はこれに加えて関節痛などを治す発散の効能があると言われている。本研究班では、明らかに胃腸虚弱の改善（補脾益気）を目的とした漢方処方の場合には「白朮」を採用し、一方、いずれでも良いと考えられる場合には、漢方本来の経験知に基づき、白朮が優先と考えられる製剤には「白朮」（蒼朮も可）とし、蒼朮が優先と考えられるものには「蒼朮」（白朮も可）のように記載した。

2. 漢方製剤の使用上の一般的注意事項

1) 証の取り違いによる不具合

漢方製剤は「証」に基づいて用いることが有効性と安全性を確保する上で重要であることを先に記したが、「証」を誤認するとどのような不具合が生じるかについて記してみたい。漢方の病態認識としてなぜ陰陽や虚実の尺度を用いるかを考えてみると、図に示すように個々の漢方処方異なった作用ベクトルを持っており、座標軸の原点の方向に向けて生体の歪みを修正するのである。「陽」に変位したものは左向きのベクトルを持つ漢方製剤を用い、逆に「陰」に位置するものには右向きのベクトルを持つ漢方製剤を用いるのである。これを取り違えて、陽の病態に右向きベクトルを持つ漢方製剤を誤って用いると、症状の改善が得られないばかりか、のぼせ感や熱感など不快な症状が現れてしまう。また「陰」の病態のものに左向きベクトルの漢方製剤を誤って用いると、冷えや下痢、倦怠感の増強などが現れるのである。虚実のいずれかに変位した病態の治療についても全く同様であって、実と虚の取り違いは症状の改善が得られないばかりか、様々な不具合が新たに現れる結果になる。

従って、漢方製剤を用いようとする場合には丁寧な病状の聴取を行い、服薬後の症状の推移をしっかりと把握することが特に重要である。そして不具合が生じた場合には「証」の取り違いであるか否かを謙虚に考え直すべきである。



駆瘀血剤の陰陽論的位置づけとその作用ベクトル

『治療薬マニュアル』医学書院 06年版 より引用

2) 漢方製剤の副作用

漢方製剤は医薬品であるから、稀ではあるが副作用が現れることがある。

① 薬剤性間質性肺炎

肺の組織構造はガス交換に預かる肺胞とこれを支える間質とから成っている。この間質に免疫担当細胞などが集まり線維化が生じた病態が間質性肺炎である。医療用の漢方製剤の副作用情報として報告されているものには、小柴胡湯、乙字湯、大柴胡湯、柴胡桂枝湯、柴胡桂枝乾姜湯、半夏瀉心湯、清肺湯、柴朴湯、辛夷清肺湯、柴苓湯、黄連解毒湯、麦門冬湯、柴胡加龍骨牡蛎湯、清心蓮子飲、防風通聖散、防己黃耆湯、三物黄ゴン湯がある。漢方製剤の服用開始後に「発熱、カラ咳、呼吸困難」が見られたならば直ちに服薬を中止し、医療機関を受診するよう指導することが重要である。本症は、呼吸音の聴診、胸部レントゲン撮影あるいは血液ガス分析によって診断が可能である。治療が遅れると致命的であることを明記しておきたい。

② 甘草配合の漢方処方による偽アルドステロン症

構成生薬として甘草を配合する漢方処方が多い。この種の製剤の連用によって低カリウム血症、浮腫、血圧上昇などの偽アルドステロン症を来すことがある。特に芍薬甘草湯に配合されている甘草の量は比較的多いので注意が必要である。従って、甘草を配合する漢方製剤の服用を開始するに当たって、血圧もしくは体重の測定、浮腫の有無をチェックし、2週間後、4週間後に経過を観察すべきである。

偽アルドステロン症を見過ごしてしまうと、食欲不振、悪心・嘔吐、筋力の低下が現れ歩行困難や呼吸筋の麻痺に至ることがある。疑わしい場合は医療機関を紹介し、血清カリウム値の測定を依頼すると良い。甘草によって本症を来すものには甘草を配合しない漢方処方を選択する必要がある。

③ 薬剤性肝障害

漢方製剤によって薬剤性肝障害が起こることがある。防風通聖散、牛車腎気丸、小柴胡湯加桔梗石膏、柴胡桂枝乾姜湯、柴苓湯、黄連解毒湯をはじめ様々な製剤での副作用報告がある。従って、漢方製剤を投与中に食欲不振、倦怠感の増強などが現れ、これらの症状が数日の内に増強する場合には服薬を中止させ、医療機関の受診を勧めるべきである。